
アナザー・マインド【もう一つの精神】

あおぞら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナザー・マインド【もう一つの精神】

【Nコード】

N1902J

【作者名】

あおぞら

【あらすじ】

葉山瞳、16歳の高校生交通事故にあった彼女は、不思議な体験にあう。夢の中である人物と会話をする…ただそれだけだった。だが、目を覚ました彼女は頭の中に自分とは違う誰かが話しかけてくるのを感じた。「もう一人の誰か」と共存しながら様々な事件に巻き込まれていく…これはPSゲーム、スクエア・エニックスが出したアナザー・マインドを下地にするファンフィクションになります

序章 暗闇の中で（前書き）

アナザー・マインド好きな人は、見ない事をオススメ

序章 暗闇の中で

暗い暗い闇の中

目を開けているのかどうかすら分からない

自分の手を見ようと顔に持って来きてみるも手も体も見えない。

「う…どこだ？」

暗くて見えないあたりを見渡すと、少し離れた場所に誰かが立っているのが見えた。

相手も気が付いたのか、声をかけてきた。

「誰？あなたは誰なの？？」

その声に言われるまま、返事を返した。

「僕は…真野まのしゅんへい俊平」

「真野、さん？」

薄っすらとだが、顔が見えてきた。

相手は女子高生だろうか、10代の女の子の顔

なぜ、こんな暗い場所にいるのか不思議になった真野は、尋ねる。

「君は、えつと…」

「あ、葉山です。葉山はやま瞳ひとみです！ごめんなさい、自分から聞いておいて」

バツの悪そうな表情で、謝る彼女に真野は、もう一度質問する。

「…葉山さんは、どうして此処に？」

「それが、思い出せなくて…」

瞳は思い出すように、一つ一つ記憶をたどる。

「…買い物へ行って、帰る時に…！あ、車。車にはねられて…」

瞳の顔は、真っ青になっていく

「私、死んだ…？真野さんも、死んでしまったの？」

勢いでなのだろうか、真野に不安な顔で質問する。

「僕？」

真野は、考えてみるが…何かが妨害するかのよう記憶が拒む

「…わからない」

とっさに出た言葉がそれだけだった。

「そうなんですか」

会話が止まり暗い中、二人の沈黙が続く

その沈黙が嫌なのか、明るい声で瞳は、話しかける。

「あ、あの真野さんは、何をしている人ですか？」

その質問にも真野は「わからない…」と、答える。

「記憶がないんですか、分かるのは名前だけなんですね」

どう、言葉で慰めて言いか分からない瞳は、言葉に困った。

真野も不安になっていく、記憶がない上に自分の姿すら確認できない

自分は幽霊なのではないのか恐怖すら感じる。

真野は、彼女に尋ねた

「僕の姿…見える？」

その質問にジツと見てくる瞳は、答える

「はい、ぼんやりしてますが形は見えます…でも、ハッキリじゃないですけど」

暗いから見えずらいですよねっと、はにかんだ笑顔で言う。

どれくらいの時間がたったのだろうか、辺りには確認したくても出来るものが

あるはずもなく、闇が全体に広がる。

「どうなるんでしょうか…これから」

不安を打ち明けるかのように、真野に尋ねた。

真野は、答える。

「大丈夫、君は死んでない」

姿が見えない自分より、

姿がちゃんと見える瞳が死んでいるはずが無いと心からそう思ったからだ。

その言葉に瞳は、嬉しそうに微笑んだ。

「二人ともそうだと良いですよね」

優しい言葉をかける彼女に心うたれる真野

「あの真野さんは、不安じゃないんですか？」

「僕は」

「え？真野さん？」

声が瞳に届かないのか、まるで相手が遠ざかっていくかのよう

「お……は……」

お互い、姿が暗闇の中に消えていってしまっ

序章 暗闇の中で（後書き）

このゲームのストーリーは、好きなのでいつか小説を書いてみたい
と思ってました。最後まで書けるよう心がけます
でも、ゲームをする予定の方は、見るのをオススメしませんよ。
ゲームの内容は、そんなに崩さないようにするので

第一話(1) 目覚め 再会

瞳は、眩しい光で目を覚ました。

そこは自分の部屋とは、違う

ベッドの側には、誰かがいた。

瞳と目があつた誰か…それは、看護師だった。

髪を上に乗ね、そこに被せるようにナースハットを付けていた。

とても笑顔の素敵な女性。

看護師は、瞳が目を開き意識が戻つたのを確認すると、慌ててナースコールで知らせる。

「葉山さんが目を覚ましました、至急203号室へ来てください」
目を覚ました場所は、病院のベッド…

(頭がクラクラする…)

白衣を羽織つた男の人がやってくると、瞳に挨拶をした。

「こんにちは、葉山さん…いや、初めましてと言つべきかな担当医の黒川です」

人のよさそうな笑顔を向ける黒川は、瞳の顔色を見て言った。

「頭クラクラするでしょう、昏睡が続いたから起こる症状だからすぐ慣れますよ」

それを聞いて瞳は、ビックリする。

先生は、病状を話すと、あとの事は看護師に任せて病室を出て行った。

瞳は、看護師に思い切つて尋ねてみた。

「看護師さん」

「何？」

「私…何日眠つてたんですか？」

それを聞くと顔色が少し変わったが、また笑顔で答える。

「それは、先生が後に話してくれからです」

「3日?一週間ですか？」

食い下がってくる瞳に諦めたように看護師が重い口を開いた。

「私が言ったのは、内緒にしてちょうだいね」

その言葉に小さくうなずく

「一ヶ月…」

「い、一ヶ月！」

そんなに眠っていたかと思っていなかったのだから戸惑いが隠せない瞳に

看護師は、声をかける。

「目を覚ましたら怪我が治ってるのよ？とくしたと思わなくちゃ」

そう優しい言葉で笑いかけてくる看護師さんに笑みがこぼれる。

看護師さんが作業を再開した時、瞳はふと夢での出来事を思い出していた。

「看護師さん」

「ん？どうかした？」

瞳は、あの夢の話を見護士にしてみたくなった。

「私、不思議な夢をみたんです」

その話を看護師は、ちゃんと耳を傾けて聞いている。

「男の人とお話をする夢…」

「そう、知ってる人？」

「いいえ、知らない人…なんですけど、姿がちゃんと見えなかったんです。影しか見えないし、声も聞いた事がなくて…」

不思議そうに考えている瞳に看護師は、話しかける。

「どんな話したの？」

「どうやら、興味をもった様子」

「えと…自己紹介をして、その人、真野さんって名前です…私、夢の中で死んだって思ってたんです」

「そんなに怖い夢だったの？」

「いいえ、怖いつていう感じは無かったです。だから、真野さんにもどうですか？って」

「どつって…怖くないかって事？」

看護師さんは、体を瞳に向けて話を聞き返す。

「はい」

「何か言ってた？」

瞳は、首を横に振ると

「それでおしまい…です」

と、言う。

「何か話していたんですけど聞こえなくて、気が付いたらベッドの中だったんです」

最後まで聞いてくれた看護師に尋ねた。

「これって、臨死体験って言うんですか？」

「んー、何ともいえないわね。葉山さんはずっと危篤状態だったから臨死体験とは言いきれないし」

冗談のような話なのに、看護師は、真剣に考えて答えてくれる。

「そうですか…」

看護師は、瞳の側に近づくと

「そんな事より、私は話しに出てきた男の人の方が気になっちゃうなあ」

嬉しそうに耳打ちしてくる。

「もしかして、葉山さんの…未来の旦那さん！だったりして〜」

「えー！だったら顔ぐらい見たかったですよ」

そんな運命的な事を話している二人の病室に飛び込んでくるように、誰かが入ってきた。

「瞳!？」

それは、瞳のお母さんだった。目をウルとさせて瞳に抱きついた。

「心配かけて、この子は…」

「お母さん…」

看護師さんもお母さんに声をかける。

「近々、検査をおこない、順調でしたら2週間で退院できるそうですよ」

「そうですか、有難う御座います」

久々のお母さんと楽しく会話をする。

その夜の事だった。

ふと誰かに呼ばれている気がした。

(ん…誰?)

眠っている頭を起こすように、その声に反応した

『分かったんだ』

(何が?)

『僕は、君の中にいるんだ』

声に反応していると、意識もだんだんとハッキリしてくる。

慌ててベットから起き上がる瞳は、あたりを見渡した。

辺りは、静かで誰か人が居るといふ気配はない。

「…今の声」

気味悪く思う瞳は、あたりを見渡しながら声を掛ける様に言葉にした。

「…真野、さん？」

『ああ』

「え！な、何!？」

辺りには、誰も居ない、その声は自分の頭の中に響いてくるようだった。

「何で…?私、夢を見てるの?」

『夢なんかじゃない』

否定しようとする、声は現実だと言わんばかりに答えてくる

その声は、頭の中に直接語りかけてくる…そうではない、頭の中にいる感じだった。

「…か、看護婦さん!」

怖くなった瞳は、慌ててナースコールで誰かを呼ぶ

「だ、誰かがいるんです!」

看護師もすぐ行きますと答えナースコールは、切れた。

『無駄だよ』

「聞こえない…看護婦さん、早く…」

『どうやって信じる？こんな事を』

「聞こえない…そんなはず無い…」

頭に聞こえる声を必死で否定する瞳の病室に昼とは別の看護士が駆けつけて入ってきた。

「葉山さん、どうされました？」

「声が…男の人の声が聞こえるんです！」

看護士は、あたりにライトを照らしてから尋ねる

「誰もいないけど、誰かきたの？」

「違うんです、頭の中に話しかけてくるんです！」

その言葉を聞いた看護士は、瞳をなだめる。

「落ち着いて、今も聞こえるの？」

そう言われて、気が付くと今まで話しかけてきた声は聞こえなくなっていた。

「今は…聞こえませんが…」

瞳は渋々とそう答えた。

「変な夢を見たのよ、きつと悪い夢だったんだわ」

「でも!？」

それでも、食い下がる不安そうな瞳に看護士さんも条件を出した。

「それじゃ、また何かあったらナースコールしてください」

「…」

「ちゃんと駆けつけるから」

「…はい」

そう会話を交わすと、看護士は、おやすみなさいと声を掛け、そのまま病室を出て行ってしまった。

人と話したからだろうか、少し気持ちが落ち着いていた瞳は考える。

(夢…?うつん、あの声は真野さんだった…)

瞳は、勇気を出してもう一度語りかけた。

今度は、気持ちの中で

(真野さん…本当にいるのね?)

その言葉に返事は、帰ってきた

『いるよ』

それは、紛れも無くあの暗い空間で出会い、会話をした相手、真野俊平だった

(…夢じゃないんだ)

返って来て欲しくなかった返答は、あっさりと帰ってくると

瞳は力が抜けた

精神が繋がっているのだろうか、瞳の気持ちが手に取るように分かる真野

心配して、声を掛ける

『大丈夫か?』

(ええ、大分落ち着いてきてます…でも、どうして真野さんが?)

『僕にも分からない…ごめん』

真野は、申し訳なさそうに謝った

(真野さん言ったよね、“僕は君の中に居る”って…)

言葉にする事で自分に再確認させる瞳

色々と考えてた瞳だったが、降参したかのように呟いた

「ダメ、混乱してきちゃった…あ!」

何かを思いついたように言った。

「意識不明の人が幽体離脱するって話、聞いたことがあるわ!」

『へえ……僕のこと?』

そのマヌケな返答に瞳はふくれた顔で意識の中で答える

(他に誰がいるんです?)

『まあ……』

(想像ですけど、あなたの意識が何かの弾みで体から出てしまい私の中に入ってしまったんですよ)

嘘のような話だが、そうとしか考えられないという出来事が瞳と真野に起きている

真野も否定は出来なかった

瞳は、少し安心したのかベットに入り、横になった。

(名前は、分かっているからそこから何とかならないかしら…あ、お昼の看護婦さんに聞いてみましょう！)

瞳は、昼に話しをした看護士に話をしてみようと思った

『変に思われる…やめといた方が』

(だって、他に頼める人いないし…)

昼の看護士は、瞳の不思議な話も真面目に取り合ってくれたのもあり、もしかしたら力を貸してくれる瞳は、そんな期待が過ぎっていた。

その日はそれだけ会話をし、瞳はベットで眠りに付いた。

第一話(1) 目覚め 再会(後書き)

意識で会話などをどう表現するべきかとても悩みました
会話の時は、間をあげたり、 を入れないようにして意識してみま
した

第一話(2) 不審な影

『 昨夜10時頃 市のパチンコ店に強盗が入り二人組みがいま
だ逃走中との 』

「嫌ね、ここって隣の市じゃない。まったく物騒だわ」

朝のテレビのニュースに文句を言うのは、昼間の看護士さん。

どうやら彼女は、瞳の担当のようで名前のプレートには、村井と書いてあった。

瞳は、昨日の行動を実行しようと思ったのだが、どう切り出せばいいか分からなかった。

軽はずみに聞いては、教えてもらえないかもしれない。

だからって、昨日の夢の人がこの病院にいるかもしれないと言ったら不審に思われるかもしれない。

もう一人が体に居るから、教えて欲しい…それこそ、話を聞いてくれなくなる可能性もある。

そんな事を言ったら、打ち所が悪かったと思われるだけだろう。考えたすえ出たのが

「村井さん、最近この病院で誰か亡くなりませんでした？」

「え？何、突然…どうしたの？」

あまりの突然の言葉に驚いた村井は、聞き返した。

「私、昨日の夢の話をしましたよね」

「あー、男の人が出てきたって…確か真野だっけ？」

村井は、動きを止めると瞳の側にやってきた。

「その人、また夢に出てきて変な事を言うんです」

「変な事？」

「“僕はこの病院で死んだ”って」

ちよつと、アホらしい話だったが村井さんは、ちゃんと話にのってくれた。

笑いながらお化けだったの？なんて言っている。

「それで成仏できないからって何とかして欲しいって……。」

「ただの夢じゃない、気にしない事よ」

やはり、この手の話は慣れているのか軽くあしらわれてしまう。

「そう思っただけけど……本当にこの病院で真野って人が死んだのか私、気になって……だから」

瞳は、村井の顔をチラツとみた。

村井も何かを確信したのか呆れた顔で言った。

「それを私が調べるの？」

「ダメ……ですか？」

「私達は、患者の個人的な情報を関係者以外に言うてはいけないのよ……知ってどうするつもり？」

村井さんの顔が厳しく感じる。

「ちゃんと供養して……」

やはり無茶な話をしたと思いつつ村井さんに手を合わせてお願いした。

「お願い村井さん！」

ダメもどだったのだが村井さんから、あまり予想もしてなかった返答が帰ってきた。

「供養つて……患者さんの精神苦痛を取り除くのも私達の仕事だからなあ」

「え！」

村井さんは、小声で言った。

「でもいい？これつきりにしてね」

「有難う村井さん！一生恩に着ます……！」

瞳も嬉しさのあまりに声が大きくなってしまった。

それを慌てて村井さんが、自分の口元に指を立てて止めた。

「声、大きいわ！こんな所聞かれたら私、この病院に居られなくなっちゃう」

「あ……ごめんなさい」

瞳が居る病室は個別の部屋、それは幸いだったのかもしれない。

村井は、ナースセンターに戻る準備をし始めた。

それが終わると、瞳に尋ねた。

「それで、名前は？」

村井は、上の名前しか知らない。調べるには、下の名前もいるのだろう。

瞳が名前を言おうとした時、一瞬だったが村井さんが恐怖に叫ぶ姿が脳裏を過ぎった

(え…何、今の)

「葉山さん、名前」

「あ、真野俊平…です」

「真野俊平ね、明後日の葉山さんの検査までには分かると思うわ」
そう言くと、村井さんは病室を出て行ってしまった。

『君は嘘つきか？』

静かに聴いていた真野は、質問した

(そ、そんな意地悪な質問しないで下さい。確かに嘘をつきましたけど…ああでも言わないと断られると思ったんです)

瞳はふくれた顔で言った

『確かに、普通に話しては取り合ってくれないだろうな』

真野も納得するように言う

(それにしてもさっきのは何だったのかしら…)

瞳は、さっき見えたのを思い返す

(村井さんが悲鳴を上げている様に見えた…あれは真野さんがやったの?)

不思議そうに真野に質問するが真野は否定をした

『いや、僕は知らない』

考えても仕方がないと思った二人は、気にしないようにした

後は真野の居場所が分かるのを待つだけと思っていた瞳だったが

その次の日、村井が病室には来ず別の看護師がやってきた。村井の事を聞こうと思ったが、変な事を喋ってしまうのも忍びないので何も聞かないで居た。

(明日、報告が来るかもしれないし)

そう思っていたが、次の日になっても、病室にこない村井が不思議に思った。

“ 明後日検査の日までには分かる ” 確かにそう言ったのに今日も姿を見ない。

すると、ドアが開いた。

村井さんかとドアの方を見るが、違う看護師が入ってくる

「葉山さん調子はどう？今日は、頭の方の検査をしますから検査室に移動しますよ？」

「はい」

検査室へ移動すると、機械に寝るように言われ横になる。

「ジツとしていて下さいね」

先生がそう言うと、機械が動き出した。

すると、何かがまた脳裏を横切った何かの機械、一瞬で消えてしまった為

瞳は思い出すことが出来なかった。

少しすると、先生から声がかかった。

「はい、検査はおしまいです」

立ち上がると、部屋に戻る為、看護師と検査室を後にした。

戻り際ナーズステーションをチラツと見るが、村井さんの姿は確認出来ない。思い切って、一緒に居る看護師にたずねてみる事にした。

「あの、昨日から村井さん見ないんですか？」

「あー、村井さん？彼女急に実家に帰るとかで休暇取ってるのよ」

「え、休暇？」

「ええ、用事が出来たとかで」

急に実家では仕方がないと思った瞳は、とりあえず戻ってくる日を尋ねてみた。

「どれくらい休暇を取ったんですか？」

「さあ、私もじかに話を聞いたわけじゃないから……」
看護師さんは、そのまま歩き出してしまった。

『休暇にしては……突然すぎないか？』

(……もしかしたら、大切な用事かもしれないわ)

真野にそう話を振られてそう反応する瞳

その時、クラツとめまいが瞳を襲った。

視界がぼやけたと思ったら、場所がいつペンして違う景色に変わった。そこは、薬が置かれているナースセンターの奥の棚だろうか、その棚に向かって立っている村井さんが居た。

薬の整理をしている様子。村井さんは、誰かが来る気配で後ろを振り向いた

だが、知り合いではなかったのか驚いた顔でをして

……

ガクツと意識が引き戻されるように瞳は、病室へ向かってる最中の通路に立っていた。

あれは、何だったのか気持ち悪くなる瞳。

「どうしたの葉山さん！」

看護師さんも心配そうに近寄ってくる。

(村井さん……何かあったの?)

そう思った時、また脳裏に何かが浮かんだ

それは、何処かの扉

扉の上には、こう書かれていた

“ 霊安室 ”

瞳は、そのまま意識を失い倒れてしまった。

『瞳!』

誰かが呼ぶ声が聞こえる

『瞳! 起きろ!』

(ん…あれ? 真野さん?)

起き上がると、そこは病室だった。
外はもう夜で真っ暗になっていた。

『瞳は、気を失ったんだ。大丈夫か?』

そう言われ瞳は頷いた

(うん…廊下を歩いてたら急に何かが見えて…)
思い返してみる

(村井さん、それに霊安室…あれは真野さんの仕業なの?)
尋ねられた真野だが

『…僕には、分からない』

記憶がないのだから考えても思い浮かぶはずが無かった

『霊安室行くか?』

真野も見えた霊安室の名前が気になっていた、だから瞳に尋ねた

(それは行けってことですか?)

おずおずと聞いてくる瞳に真野は、あぁと返事をする

(でも何で霊安室なんだろう…真野さんが死んでるって事なら分かりますけど…)

『それを確認したい』

(死んでるかどうかを確認するって事ですか?…分かりました。でも…)

瞳は、不安な顔をして尋ねた

(お昼にしませんか? やっぱリコワイです…)
だが、真野も食い下がる

『昼間だと誰かに見つかる可能性が高い、だったら夜コソコソと行った方が良い』

(そうですね…でも、もっと良い表現ないんですか？コソコソって泥棒みたいですよ)

瞳は、覚悟を決めて病室を出ると、周りに見回りの人がいないのを確認しながら階段を下りていった。
一階までくると瞳は立ち止まった。

『どっした？』

(えっと…霊安室ってどっちですか？)

キョロキョロする瞳に真野は言う

『普通は地下だろう…行き方が分からないのなら案内板をみるんだ』

(あ、なるほど)

瞳は、案内板を探して霊安室の文字を発見すると、階段がある方へ歩いていった。

地下への階段を下りると一階とは違うひんやりとした涼しさが漂う。光も少なく寒いと不気味さが過ぎった。

うつすらとだが霊安室の文字が見え、たどり着いた。

『ドアを開けよう』

(うっやっぱり止めましょう?)

怖がる瞳に真野は元気付ける

『瞳は大丈夫だ！ガンバレ』

(他人事だと思って…真野さんにとっては他人事なんですよねぇ)

『一生のお願いだ！』

(一生って…ここに真野さんが居たら一生もない気がしますけど)

呆れた言葉に瞳は吹いた。

『聞こえた…』

助けて

また聞こえた。

よく見てみると、亡くなった人が置かれる台の下に縄で看護師が縛られていた。

さつき足に引つかかったのは、この縄のようだった。

「か、看護婦さん！」

服装からしてこの病院の看護婦だろう、だが村井ではなかった。

「二人組みの男に！警察に電話を…」

「は、はい！！！」

瞳は慌てて霊安室を飛び出すと、公衆電話を探した。

「あ、あつた！」

番号をかけると、すぐに相手は出た。

『はい、こちらは110番です。どうしました？』

「あの、看護婦さんが縛られてて！」

『そこは、T大学付属病院ですか？』

「はい！」

『状況を詳しく教えてくれませんか？』

瞳は、思い出せることを慌てて話し出す。

「二人組みの男に襲われたと言っていました。もしかしたら、ニユーアの強盗かもしれません！」

『あなたは病棟のどちらから…？』

場所を説明すると警察の人は、関係者を向かわせましたと言った。瞳が電話を切ろうとした時

『あなたは、安全な場所に隠れていてください』
と、言い残して電話は切れた。

気持ちが一段楽したのか、瞳は看護士が心配になった。

「そうだ…あの人の縄を解いてあげないと」

地下へ戻ろうと、階段へ向かって歩いてると、後ろから誰かが走ってくる音がした。

瞳は振り向いて見るが通路は薄暗く良く見えない、背丈からして男性だろうか…薄っすらと残る廊下の灯が少し当たるがその人物を影としてでしか浮かび上がらなかった。

「誰!？」

呼びかけてみるが、その影の男は息を整えると勢いよく瞳に向かい走ってくる

瞳は、身の危険を感じ慌てて逃げ出し、何とか自分の病室まで戻ってきたが、パニックになる。

「どうしよう…あの人は誰なのかしら」

『強盗犯?』

(やっぱり…そうですね?どうしよう…そうだ!鍵を閉めれば!)

『鍵なんてないだろ…』

(そうですね、そしたらえっと…)

『隠れるんだ』

(隠れるって言ったってどうやって)

戸惑う瞳に真野は声をかける

『落ち着け…周りをみる』

(周りって…ベットとロッカーくらいしかないですよ)

真野も瞳の視界から確認すると

『ベットの下は隠れられるか?』

言われるまま覗くが

(ダメです…機材があつて)

色々な機材が置いてあり、瞳が入れるスペースは、なかった

『ロッカーの中だ』

ロッカーを開けると、ちょうど入れそうな広さになっていた。

(これなら…)

ロッカーに入るとドアを閉め身を潜めた。

少しすると、人影がドアの前に止まり、ドアが勢いよく開いた。

瞳はロッカーの少しある隙間から外を覗いてみると、影はロッカーを避け病室内を探し始めた。

そして、居ないのを確認したのかドアへ向かって歩いていく影に気持ちいをなでおろした直後だった

ガタッ

ロッカーのドアが開いた、そこには男が立っていた。

「っ！」

驚いた瞳は、男の顔を見る前に気絶をってしまうのだった。

第一話(3) 行き詰る(前書き)

ちょっとオリジナルが混じりました

第一話(3) 行き詰る

お昼近い時間、瞳の病室に誰かが入ってきた。

「なんだ、起きてるじゃないか？」

そう入ってきたのは、二人の男

一人は、歳が40代くらいだろうか、見た感じは、とても頼りになりそうだ

もう一人は、20代の男性。こちらも、頼れそうな感じの若者、女性から見ればカッコイイと思える顔立ちをしている。

「ちよつと失礼しますよ。君が葉山さんだね？」

二人のうち年上の男が瞳に話しかけてきた。

瞳は、小さく頷いた。

「警捜査一課の鳴海健一と、言う者です」

どうやら二人は、警察の人のようだ。

「こっちは、猿渡刑事」

「どうも、猿渡純です」

若い方の刑事も軽く会釈をした。

鳴海刑事は、すぐ本題に入った。

「今日の午前一時、110番に通報したのは君だね？」

「そうです」

「その時の事を詳しく話してくれないかな？」

瞳は、また頷くと説明をする。

地下室の事、電話した後に部屋に入ってきた影の話

「…その人物の姿は、シルエットしか見てないんだね？」

「はい」

それを聞くと、鳴海刑事は納得するように呟いた。

「連中が言ってたのは、それだな」

「何をですか？」

瞳は不思議そうに聞き返した。

「君が連絡してくれた2人組みは、パチンコ店を強盗した奴らだつた。奴ら、一人が怪我をして手当ての為此の病院の霊安室に紛れ込んでいたんだ。」

話からして昨日の二人組みは捕まったのだろう
猿渡刑事も続ける。

「だけど、そこで人影をみて、病院から逃げ出してきた所を捕まっただけで、幽霊だと叫んでたらしいよ」

瞳は自分が見た影も、その人物かもしれないと思った。

「どうせ、患者を幽霊と見間違えたんだろ。君もきつと知らせに来てくれた患者を見間違えたんだよ」

鳴海刑事は、馬鹿らしいと言う顔をしてそう言った。

「刑事さんが言う、そんな感じじゃなくて…こう、何ていうか…ダダッて迫ってくる感じがして」

瞳はあの影が知らせに来た人には、思えなかった。

あんなに執念深く探す人がそう言った人とは考えにくかったからだ。上手く言葉で説明できないが、何とか自分の気持ちを伝えると、鳴海刑事は唸った。

鳴海刑事は言う。

「仕方ない、とりあえず念のため少しの間、警備をしよう…サル！サルと、言うのは鳴海刑事の猿渡刑事への通称の呼び方だよだ。」

強盗犯に他に仲間がいると思ったのだろう、病院を警備することを提案した。

「そう言いますけど、人手なんて簡単に用意出来ませんよ」

「それをどうにかするのがお前の仕事だろうが！」

「…はいはい」

怒鳴ってくる鳴海刑事に軽くあしらう猿渡刑事

「ハイは、一回だ！…まったく」

鳴海刑事は、瞳を見て

「何かあったらご連絡を」

と、言い

二人は、瞳に挨拶をすると部屋を後にした。

『…でこぼこコンビ』

真野はボソツと言ったつもりだったが瞳には、ハッキリと聞こえている

(真野さん、失礼ですよ…)

真野は、言葉のあやだと言い

『警察は、見間違いで片付けたみたいだね』
複雑な気持ちの瞳も頷く

どう考えても瞳を狙ってたように感じる。

もし、理由も無く追いかけているのなら、
部屋に隠れた時、どうしても中にまで追いかけてきたのか分からなくなる。

『とりあえず、村井さんを待ってみよう…』

(そうですね…)

入院生活は、退屈ではなかった。

ある日、病室にノックが響く

「はい」

返事をする、そこには髪の毛の長い高校生が顔を出す

「あ、真理子！」

ビックリだったようで嬉しそうな顔をする瞳

「やつほう瞳、久しぶり。元氣そうじゃない」

彼女は、瞳の高校の親友、高木真理子たかきまりこと言う。

「退院いつ頃なの？」

「早ければもうすぐかな？」

「そっか、じゃあ4月には学校で会えるね」

そんな話をしはじめる。

今の季節は、3月後半、日にちまで言つと29日となる。
瞳の学校は、3学期が終わる頃だろう

『この子は、瞳の友達か?』

真野が不意に話を振ると、頷く

(そう、親友の真理子よ。何?興味もったの?)

ふざけてだろうか、そう突つつく瞳

『残念、僕は瞳一筋だ』

(ちょ、何を言つんですか!)

からかうように言つ真野に少し戸惑う瞳

「ちょっと瞳!聞してるの?」

ポーツとしている瞳に怒る真理子を瞳は、慌ててなだめる。

「ご、ごめん!ちゃんと聞いてるから」

本当?と、言いながらも真理子は、またお話タイムが始まる。瞳と
違いよく話すタイプのようだ。

時間が経つと、真理子は立ち上がり、じゃあ帰るねと、言い病室を
出て行った。

嵐が去つた静けさとは、この事だろうか?また病室は静かになった。
静かになった部屋でふと瞳は考える。

(いま、ふと思ったんですけど...真野さんって、真理子とか見えて
るんですか?)

不思議だった さつきも真理子に対して“この子”と、表現したから
真野も言われて気が付いた

『そう言えば...でも、君の見る視野だけだけど』

真野には、今話している瞳の姿もそれなりに見えていた
精神で話しているからなのかは分からないが、瞳の感情は伝わって
くる

瞳の方も重要な事に気が付いた

(……と、言う事は……やだ！お風呂とか入りづらいじゃないですか！……着替えとかも目をつむらないと)
自分の視野と言うことは、そう言う事になるらしい
それを知って真野も少し男として複雑な気持ちになっていた……

日は経ち

一週間もしないうちに退院となった。
それでも、村井さんは、会うことも見かける事もなかった。

季節は四月に入った頃の、暖かな日和
帰るさい入り口まで担当医の黒川先生が送ってくれた。

「回復して本当に良かったですね」

「先生が見てくださったから、この子も無事退院できましたわ」
先生と母親は、そう話している。

(はぁ……村井さん、とうとう会えなかった)
そう溜息を付く瞳

『黒川に聞こう、何か知ってるかもしれない』
(そうですね、聞いてみます)

瞳は、母との話の区切りを探し尋ねてみた。

「先生、村井さんはまだ実家から戻っていないんですか？」

「え？……ああ、村井君か……瞳さんが退院すると言うのにね」
少し驚いた顔をしたが黒川先生は、呆れた顔でそう呟いた。

「村井君に何か言いたい事でもあったのかな？」

そう言われて瞳は、言葉を詰まらせてしまった。

「え、いえ、そうじゃないんですけど……」

「村井くんが戻ってきたら君の事を伝えておくよ」

「はい……」

母が挨拶をしに瞳の前に出た。

「それでは、これで失礼します。大変お世話になりました」
「いえ、お大事に」

母と先生が会釈をすると、瞳も慌ててお礼を言う。

「有難う御座いました」

瞳も母と共に家に帰って行くのであった。

自宅 瞳の部屋

自宅についたのはお昼頃だろうか

瞳は、部屋に戻ってから考える。

頼りにしていた村井には、退院までとうとう会えず
途方にくれる

（真野さん…？）

いるか確かめるように真野に話し掛けた

『なんだい？』

（これから、どうすれば良いのかしら…）

瞳は、考えるようにベットに腰をおろす

（真野さんの事は、分からないまま…それに頼りにしてた村井さん
に会えないし…）

考え込む瞳

真野も考えながら言葉にする

『病院へ行ってみるか？』

（病院に？）

もしも自分が死んでないのなら…真野は、提案をした

『僕を見舞うんだ』

最初は、どういう意味か分からなかった瞳だったが、あつと言う顔

をした

（あなたのお見舞いつて事で 居るか調べるんですね！）
『もしかしたら、分かるかもしれない』

納得したのか、一日、時間を置いてから病院へ行つて見ることにした。

・
・
・

日をおいて瞳が、やってきたのは病院の入り口前。

お見舞い専用の受付は、あまりなれないので緊張する。

「…こんにちは」

挨拶をして受付を覗くと、受付の人が顔を出してくる。

「お見舞いの方ですね？ここに、名前を記入して札を胸につけてください」

慣れた手で、パツパと話が進んでいくのを慌てて止めた。

「いえ、あの！…真野俊平って方は、この病院に入院されていますか？」

「あ、少々お待ちください」

受付は、側にあるパソコンを動かして調べ始めた。

カタカタカタ…

少しばかり期待をしていた瞳だったが

「申し訳ありませんが、真野さんという方の記録は、ありません」
それを聞くともう一度聞き返す。

「退院や移ったとかじゃ、ないんですか？」

また受付は、調べてみるが

「…ええ、そんな記録もありませんね」

瞳は、残念そうにお礼を言うと、その場を後にする。

瞳は、歩きながら考える。

死んだわけでもない、入院しているわけでもない。

いったい彼は、何処から来た誰なのか、また振り出しに戻った気持ちになる。

（真野さん…あなた本当に何者なの？）

不意にそんな質問をするが

『…真野俊平』

軽くあしらわれてしまった

（もう、それは分かってるわ）

帰ろうとした時、見慣れた後姿を見かけた。

最初は、見間違えかと思つた瞳だったが

「あ！」

それは、入院中に会えなかった人物

「村井さん！！」

そう、村井だった。

名前を呼ばれた村井は、振り向いて瞳をジッと見た。

瞳も側に近寄っていく。

「やっと会えた…もう、急に実家に帰ったって聞いてビックリしました。あれから色々」

「あの、御免なさい…あなたは？」

思いがけない言葉が、村井から飛び出してきた。

「え、葉山瞳です。入院中お世話になった…」

「…葉山さん？」

困った顔をする村井

瞳は、知らない振りをしているんじゃないかと思いきのまま、話を続けた。

「村井さんに頼んだ事、誰にも話してません。安心して下さい！」だが、困った顔をして村井が言った言葉は

「申し訳ないですが、私、あなたに会った事も頼まれ事もないです…人違いです」

本当なのだろうか、村井の表情は真面目そのもの

「そんな…」
瞳が食い下がろうと口を開くのをさえぎるように、急ぎますからと言が残し

村井はその場から居なくなってしまった。
瞳は何とも言えない気持ちになった。

確かに、村井さんと話をしたのはたったの二日ほど…それでも、仲良くなったと思っていた瞳は、途方にくれる。

人はそう簡単に忘れるのだろうか…
もしかしたら、嫌われるような出来事が村井に起こったのかもしれない

そんな風に頭の中でグルグルと考えが頭の中で渦巻く。

『とりあえず、家に戻ろう…夜になってしまつ』

真野の言葉にうなずき、歩き出す。

『後で色々整理してみよう、混乱してしまつ』

(はい、私もちょっと考えが纏まらないです)

家に着いたのは、夕方を過ぎた頃
夕食の準備は出来ていた。

「お帰り、ご飯出来てるわよ」

母親が食器を用意しながら瞳にそう言った。
「うん」

食事をすませると、自分の部屋に行き、ベットに腰掛け気持ちを整えた。

そして、入院から今日までの事を真野と振り返ってみる事にした。

(何か色々ありましたね…結局、真野さんの事は分からないまま、それに)

何か引つかかると言う顔をする瞳、真野はその理由が分かっていた

『村井さんか?』

瞳は頷くとうつむく

(村井さん、どうしちゃったのかしら…)

あの時の態度は、普通じゃないと思う瞳

『そしたら、また改めて会いに行くとしよう』

(そうですね、ちゃんと話を聞かないと)

瞳も納得するように頷いた

真野がふと考え、話が変わる

『瞳を襲った黒い影…あれは何だったんだ』

その後、瞳は気絶をしてしまった為、真野も視界は真っ暗になった
だから見る事が出来なかったのだ

(…)

瞳は、真青な顔をする。よっぽど怖い体験だったのだろう

真野は、自分が不味い事を振ったと思い謝った

『ごめん、瞳は怖かったんだよな』

(とても、怖かったです…)

あの時のことを振り帰って見るものの、自分が襲われる理由がやはり見当たらない

考え込む瞳に慌てて真野が話題を変える

『あー…君の事でも話そうか?』

真野のとっさに出た言葉に瞳は戸惑いながら反応しようとする

(え、えと…私ですか？えと…葉山瞳、16歳の高校生でいきなりだったので自己紹介が始まってしまっ…)

『あ、いや…そういう意味じゃなくて』

真野に言われ赤くなる

(そ、そうですね…そういう事じゃないか)

『僕は、君の事が心配なんだ…こんな風に一緒に居る事が悪い事じゃないか』

瞳の体に悪い影響がないか真野は心配をした

だが、瞳は

(そうですね、真野さんも困りますよね)

真野の心配をする

(早く真野さんの事どうにかしないと…何か分かる物とかあれば良いのに)

そう言う瞳に真野は

地域の電話が乗っている本は、どうだろうと進めた

もし、真野がこの地域に住んでいるのなら、“真野”と言う苗字があるかもしれない

瞳は、さっそく親に頼み出してもらっ。

少し変に思われたが、何とか言葉で丸め部屋に持ってきた。

「真野…ま…の…」

だが、探してみるが、真野と言う苗字はちょっとあったが、名前自体が当てはまらなかった

真野自体、記憶がない為、誰か家族の名前が載っているのかもしれないが

本人が分からないのなら意味がない。

(名前はないですね…)

『…』

ふと、瞳は何かに目を留めた。

『…どうした？』

真野にもそこに“事務所”の文字が目が付いた。

「アヅキ霊相談事務所…」

瞳は、それをそのまま読んだ。

「ここへ行って見ましよう」

瞳の言葉に真野は突っ込む

『僕は、幽霊かよ』

(そんなようなものかもしれないですよ?)

ふくれる真野に意地悪そうに言う瞳

(それに、何かの手がかりを得られるかも…)

今は、真野が誰なのか分からない

それに、頼りにしていた人が話を聞いてくれない状態で、探すのが
振り出しに戻るのなら

頼ってみようと思った。

間章（前書き）

第一話 その後みたいなき感じで…

第二話に続く間の話

間章

出かける準備をする瞳

行く場所は、瞳が入院していた病院。

何故行くかというと、看護師の村井に会いに行く為

何とか村井の居る病院内に来る事が出来たが
ナースステーションには、姿が見当たらない。
何処行ったのか困っていると

「あら、あなた…葉山さん？」

声を掛けられて振り向くと、そこには見た事がある看護師が居た。

「あれ…？」

「ほら私、葉山さんが霊安室に来て」

「あ…」

そう、あの時縛られていた看護師だった。

「どうかしたの？」

看護師は、尋ねてきた。

「あの、入院中お世話になった村井さんに会いたくて…」
それを聞いた看護師は言う。

「村井さんは今あちこち回ってるのよ。すぐ戻ってくると思うんだ
けど…」

「…そうなんですか」

「どうやら、すれ違いになってしまったらしい。」

『すれ違いか…』

（しかたないか…仕事でしょうから）

「ここで、待つても良いですか？」

「それが…外来の方と話してるのを婦長に見つかると五月蠅いのよ

…」

困ったように看護師さんがナースステーションをチラッと見ました。

「そうですか…」

「大丈夫、喫煙所で待ってて。村井さんにはそこへ行くように、私から言っておくから」

思いがけない提案が、看護師の言葉から出てきた。

「本当ですか！有難う御座います」

瞳は嬉しそうにお礼を言った。

「ううん、良いのよ。あなたには恩人だからね」

怖い目にもあつたが、あれがあつた事で思わぬ助けを手にいれることが出来た。

少し時間がたつたころ

喫煙室に不機嫌そうな村井がやってきた。

「あ、村井さん」

「あなた…」

一瞬ためらつたが、瞳は質問した。

「真野さんを調べている事が病院の誰かにばれて、だから私の事を知らないって言ってるんですか？」

「…真野？ばれる…？一体何なの？」

村井が言うその顔は、本当に知らないと言っているようだった。

「…」

「私…本当に、知らないのよ」

そう言うと、喫煙室から村井は出て行ってしまった。

「村井さん…」

真野もどうも、嘘をついている風には感じられなかった。

もしかしたら村井に何かあつたのかもしれない。

だが、それを知るすべは、まったくと言って良いほど、二人には無かった。

4月11日

この日は、アヅキ霊相談事務所にお邪魔することになっていた。電話で連絡を取ったさい、この日に決まったのだ。

事務所に入ると、奥へと案内される。

専用の個室だろうか、用意されている椅子に座る瞳

緊張して心臓の音が耳元まで聞こえてきそうすると、誰かが部屋に入ってきた。

『……まさか、あれじゃないよな』

(…う…ん)

二人が何ともいえない気持ちになっている 来た相手…

それは 赤いマントを着て真赤な紅をぬっている女性、だが容姿は良い方だろう。

瞳の向かいの椅子に座る。

よく見ると、服も上から下まで真赤であった。

普通に考えたらとても、信用できるような格好とは思えない。

「お待たせいたしました。 亜月^{あつき}レイカです」
女性は静かに話し始めた。

「電話でもお伝えしたように当事務所は、葉山様がかかえているお悩みに対し葉山様の守護霊様から助言を頂きお伝えする…」
と言う方式を取っています」

亜月は、理解は出来たかと瞳に話を振り、瞳もはい と、返事をする。

『…ウソ臭い』

信じられない真野は、ボソリとそう言う

「まず、葉山様の守護霊様がどのようなか霊視したく思いますので少しお時間を…気の乱れは、霊視のさまたげになりますので、リラックスしてお待ちください」
そういうと、目をつむりはじめた。
精神統一でもしているのだろうか 時間だけが徐々に過ぎていく。
(……ふう、何かドキドキしてくる)

『恐れ入りますが葉山様?』

真野が楽しそうに瞳に話しかけると、困った顔で瞳は言う

(か、からかわないで。恐れ入ってないくせに…)

瞳は心を落ち着かせようとしていると

『ほらほら、リラックスリラックス』

ちよっかいを出してくる真野

(もう…分かってるから話しかけないで下さい)

『守護霊とか、どこまで本気なんだか…』

(あなただって、似たようなものじゃない…自分の状況自覚あるのかしら?)

『それは、“霊”って意味でかな?』

(もう、ちやかさないでつてば)

そんな風に二人が話していると

「葉山様?」

突然声をかけられてビックリする瞳。

「はい…」

「さきほども、申し上げたとおり気の乱れが霊視の妨げになります」

「わ、分かりました…」

瞳が納得をすると、また亜月は精神統一しはじめる。

(ほら、怒られちゃった…)

真野に不機嫌そうな顔で呟いた

『本当にゴメン』

反省の姿勢を見せる真野

(悪気は…なかったと思っておきます…だから静かにしててくださいね)

だが、すぐ話しかけてくる真野

『亜月って人、凄いな』

(もう…こんどは、なんですか?)

気持ちを落ち着かせようとするたびに話しかけてくる真野にムツとなる

『君の気の乱れを言い当ててる…』

そう言われ、瞳もあつと思つた

(そう言えば…)

真野と瞳が話している会話は 外からは聞こえない。

亜月は、その会話が気の乱れだと感じ反応した、真野はそう考えたのだ。

「葉山さん」

「ごめんなさい！」

さつきまで真野と話していた瞳は、また気が乱れたのかと思ひ、すぐ謝つた。

「霊視が終わりました、お聞きしたい事を」

手でどうぞと示す亜月に瞳は悩んだ。

「なんて言つたら良いか…」

まさか、こんな不思議な事をする人相手でも、頭の中に違う人がいるなんて、言う事ができない。

亜月も黙って返答を待つ

「えっと、つまりですね…私、病院で入院してたんですが」

ぐだぐだになりながらも説明をする瞳。

「要するに、病院で妙な霊を拾つてきてしまったと…」

「霊なのかどうか、その正体が知りたいんです」

その話を聞き終わると、亜月は守護霊様に話を聞くと言い目をつむった。

「葉山様の中にいる真野という方は、心配するほど霊的ではないそうですね」

それを聞いて少しホツとする瞳

「それじゃ、いったい？」

「原因は、入院中の時にあるようです。複雑な科学的な何か…そうおっしゃってます」

あまり理解が出来ない瞳は、少し困惑する。

まだ言葉に続きがあったのか亜月は話を続けた。

「真野という方は、害は無いようです。葉山様がこれから出会う危機、などから助けてくださる存在…」

「助けてくれる？」

瞳は不思議そうに聞き返した。

「ただ、ほとんどの危険な事は、その真野という方が原因との事、注意するよう守護霊様がおっしゃってます」

「は、はあ…」

何だか、真野が悪いモノなのか良いモノなのか分からない、矛盾した言葉が返って来て困る瞳。

「私から出す方法は、ないんですか？」

瞳は亜月に尋ねた。

「…真野という方の正体を突き止めれば道が開くと」

「でも、どうやって…」

名前しか分からないうえ、何処から手に付ければ良いか分からない。電話帳でも発見されなかったのに、今では名前すら疑わしく感じてしまう。

「しんぶん…そう聞こえます」

亜月から、そう聞いた瞳は

「そうか！事故か何かあるなら新聞に載ってますよね」
立ち上がると、お礼を言う。

「有難う御座います、助かりました！」

亜月も軽く会釈をした。

「お気をつけてお帰りを」

時間は、夕方ころだった。

いったん家に戻った瞳は、前の新聞を探し読んでみる

「ん〜、真野…まの…」

真野という名前は見つからない。

最近の新聞には載ってないのだろう。

今、家にあるのより古いのを親に求めたが、もう捨ててしまったと言われる。

「もっと前の新聞…何処で見れるかな…」

『図書館へ行くぞ』

悩んでいる瞳に真野が意見した

(図書館…？あ、そうか。昔の新聞も置いてますよね)

納得した瞳は、次の日図書館へ行く事にした。

次の日 午後

瞳は、持ってきた新聞を抱えて図書館のデスクにまとめて置いた。

「よし！」

気合をいれる様に声を出すと真野に言う。

(真野さん、いきますよ？)

『分かった…』

瞳は新聞に目を通す。

火事、放火。事故、ひき逃げ。

瞳が持ってきた新聞を全部、目に通すが、真野俊平と言う名前は見
つからなかった。

持ってきた新聞を見終わった頃には、夕方になってしまつた。

「はあ…そう簡単には、見つけられませんね」「
残念そうに溜息を付く。

『また今度だな』

真野の言葉に小さく頷く瞳であった。

第二話(1) 学校へ

私は学校の廊下を
走っていた

階段を登り 屋上を目指した。

「やめてくれ!!!」

屋上に着くと 誰かの声が聞こえる

悲痛な男の叫び

私は その男の人を一瞬見ると

屋上から身を外へ投げた

私の体は 落ちてゆく

下へ下へと

「!!!」

鼓動は、高鳴り

耳まで聞こえてくる気がした

『大丈夫か?』

真野は、瞳に声を掛ける。

まだ早く動く鼓動を落ち着かせながら、真野に返事を返す。

(大丈夫…)

一つ溜息を付くと、真野に話を振った

(真野さん、見ました？さっきの…)

『僕も見だよ。気持ちの良いものじゃなかったな』

(ええ、本当に気持ち悪い夢でしたね…)

自分が飛び降りた そんな感覚

夢にしてはとても、リアルに感じた。

「ん…悪い夢は良いことがある前兆とも言えるし、気にしないで
おじい」

前向きに考える瞳は、背伸びをしてベットから起きた。

「今日から学校へ行くし、気持ちを切り替えなくちゃ」

そう言いながら、目をつむって服を着替え始める。

瞳は、高校2年生として初登校になる。

『学校、楽しみか？』

(もちろん、久々ですから)

瞳は、着替え終わると朝食を食べ、学校へ行くのだった。

(学校では、静かにしてて下さいね)

確かに授業中に話しかけられては、困るもの

『考えておく』

(もう…)

学校が近づくにつれて、歩いている学校の生徒の数も増えていく。

瞳は、少し緊張をしていた。

始業式は、終わってしまっている為、少し気後れしてしまうからだ。

校門にさしかかった時、門の壁を見つめる一人の男子が目付いた。
「何を見てるのかな？」

一箇所を見つめている男子は、見終わったのか、そのまま学校へ入っていく。

瞳も壁の方へ近寄って見てみた。

そこには、落書きがあった。

赤い逆三角 三角の中には『TIAMAT』と、書いてあった。

「落書き……？この文字って何て読むのかしら？」

何かの模様だろうか、その字を真野も見ていた。

「あ、瞳〜」

すると、誰かが瞳を呼んだ。

振り向いてみると、それは真理子だった。

「真理子！久しぶり」

「何言ってるのよ〜。この前、お見舞い行ってあげたじゃない」

「でも、退院してからこうして友達に会々と、やっぱりホツとするね」

二人は、楽しそうに門をくぐりながら話し合う。

「さっそく、金田くんに目をつけたの〜？」

真理子にそう話を振られ首をかしげる。

「誰それ？」

「さつき見てたでしょ、校門の所で。彼、ちょっとカッコ良いもんね〜」

門の所で見たと、言えばさつきの男子。真理子は、その男子の事を言っているのだろう。

話の流れが分かった瞳は、否定をした。

「そんなんじゃないよ……あれは」

さつきの男の子金田。

彼は容姿端麗と、言える美少年。

真理子に勘違いされるのもしょうがない事なのかもしれない。

「いいからいいから……それより、実行委員になりなよ」

「え？」

話の流れが真理子のペースになっていく。

さっきまで金田という男子の話をしてたかと思ったら、今度は実行委員の話。

「若葉祭の実行委員よ、今日ホームルームで決めるって言ってたから、立候補しなよ」

若葉祭と言うのは、瞳の通う学校の学際の一つのようだ。

「や、ヤダよ私…ずっと休んでたし、クラスにだって今日から慣れるのに」

困った顔で、瞳は言う。

「だ・か・ら、するの！遅れた分、一気に取り返さなくちゃ、金田もやるって言ってたし」

瞳は金田が好きだと誤解をされているようだ。

「うん…」

「あたしもやるんだから、ね？」

瞳は聞き返した。

「え、真理子するの？」

「もちろんですよ、だから立候補してよね」

そんな大変なのを自分からするイメージが無かった真理子に、瞳は心の中で謝った。

瞳の教室は、真理子と同じクラス

席も凄く近い場所だった。

（だから、ホームルームなんて話、したのね…）

瞳は、そう思った。

周りを見ると、さっき門で見かけた金田という男子もいる。

クラスに来る生徒達は、瞳を見るとおはようと、挨拶をしてきた。

何とかクラスには、馴染んでいける気がする瞳。

すると、チャイムが鳴り響いた。

少したつと、担任が入ってくる。

担任は、メガネをかけていて歳は40くらいだろうか
名前を樋口良治ひぐちりょうじと言う。

さっそくホームルームで、若葉祭の実行委員を決めることになった。
男子と女子2人ずつ、男子の方はすんなりと決まると、女子の方に
回ってきた。

「実行委員やりたい奴は、いるか？」

先生は、あたりを見渡しながら生徒に尋ねる。

すかさず手を上げたのは、真理子だった。

「はい！私、やります」

「お、やる気あるな」

先生は、嬉しそうに言う。

「瞳…？」

小声で声を掛けられて、瞳は、ハッとする。

学校に来て早々、実行委員は少し気が引ける瞳は、悩む

「なんだ、葉山。お前がやってくれるのか？」

先生も顔を覗くように聞く。

「そうですね、立候補！」

「高木、お前が言うな…葉山が“やる”と言わないと立候補にはな
らんぞ」

(どうしよう、真野さん)

悩みに悩んで話を真野に振る

『実行委員をやるのか？』

(やりたくないよ…楽しくなさそうだし)

『周りにやりたがってる人は？』

(いない…)

やりたくない

でも、真理子との一方的だったが約束は約束、だからこそ悩む

『頑張れ、出来るさ』

真野は、瞳の背中を押すと、瞳も腹をくくったように頷いた

「先生、私もやります……」

瞳は、おずおずと立候補した。

「立候補……で、良いんだな？」

先生の問いかけにも、はいつと頷いた。

すると、タイミングよくチャイムがなる。

「それでは、男子は北川、きたがわ金田。女子が葉山、高木。以上4名が若葉祭の実行委員だ」

先生は、そうクラスの生徒に伝え終わると

決まった4人に今後の事を伝えた。

「第一回の委員会は、今日の放課後だ。先生も行くから職員室に呼びに来てくれ」

先生は、そのまま教室から出て行く。

そして、静かだった教室は生徒達の話し声で賑やかになった。

実行委員に立候補して不安な瞳だが、とりあえず頑張ろうと心に決めるのであった。

「取り込まれる細菌は、多細胞生物の細胞の中に」

今は授業中、どうやら生物の授業のようだ。

「それに瞳が事故にあった時にさ、校長が『葉山は危篤だ』って全校生徒に言っちゃってさ。」

しかも、半泣き」

「本当？……それって嫌だな……」

真理子と瞳は、隠れて話をしていた。

「だから瞳って学校中で有名になってるよ」

「恥ずかしいなあ……」

楽しそうに話している二人は、今が授業中と言つことを少し忘れているのかもしれない。

「葉山、高木！」

気が付いた生物の先生は、二人を呼ぶ。

二人は、きまらずそうな顔をして先生の顔を見た。

「ちゃんと、授業は聞いてたのか？」

「聞いてましたよ。ね、瞳」

「は、はい」

先生の言葉に頷く二人。

そんな二人は、先生の質問の標的になるのは言うまでもなかった。

「それなら高木に質問をしよう」

真理子は、嫌そうな顔をする。

「共生とは、それがどんな事なのか説明してみろ……」

困った真理子つは、瞳に小声で聞いた。

「ね、ねえ……今何ページやってるの？」

「25ページ、共生がどうのこうのって……とこかな？」

「わ、わかんないよ……」

二人で困った顔をしてると先生がせかす。

「高木……相談せずに答えろ」

（真野さん！）

「ん？」

（分からないですよ？質問の答え……）

瞳は、ダメもとで真野に聞いたが

返答はあっさりと帰ってきた。

「細菌が細胞に取り込まれる」

（え！真野さん凄い）

「……」

さっきまで先生が話していたことを教えただけだった

だから、別に凄くはないと真野は思ったが、口には出さなかった

「真理子、“細菌が細胞に取り込まれる”だよ」

「細菌が細胞に取り込まれる……です！」

「正解だ…」

答えは正解だったようだ、瞳も一安心をする。

「休んでいた葉山の方が勉強していたようだな」

こつそりと教えたくもりが、バレバレ…

そのままの流れで、瞳に質問が飛んでくる。

「次は、葉山だ。多細胞生物に共生している代表的なものを2つ挙げてみる」

「二つ…ですか」

瞳は手を合わせるように真野に頼み込む

（真野さん、お願い。もう一回だけ！）

『…やだ』

（そんな事言わないで、手助けだって思っ…）

本当に困った顔をする瞳を見かねたのか

真野は教えてあげる

『ミトコンドリア…』

（もう一つは？）

『…葉緑体』

真野の方も少し自信がなかった

瞳は、有難うとお礼を言うと先生に2つを説明をした。

先生は感心したようにうなずいた。

「ちゃんと予習や復習をしているようだな、だからと言って授業中、おしゃべりするんじゃない！」

「すみません……」

どっちにしる怒られてしまった瞳

真野も答えが合っていて少し安堵した。

（真野さん頭が良いですね）

嬉しそうに話しかける瞳

『僕に頼らないで欲しい…』

真野は、瞳の為だと言うが

(分からない時は、教えてください、ね?)
なんて言われる

「葉山どうした？具合でも悪いのか」

瞳が真野と話しているつもりでも、他の人から見れば
ポーツとしている様にしか見えない姿。

瞳は、慌てて否定した。

「いえ、大丈夫です！」

すると

また何かがふつと脳裏に見えた。

何かの入れものだろうか 何かの装置のふたが閉じる瞬間
自分がその中にいて ふたが閉じる瞬間

「おい…大丈夫か？」

「は、はい」

「病み上がりなんだから、無理するなよ」

先生は、そう瞳に言っていると授業を再会する。

一瞬だったが瞳には、その装置が見覚えがあった

入院中見えた何かの機械、それを思い出した。

少し心に引っかけかりながら 瞳は授業に意識を向けるのだった。

第二話(1) 学校へ(後書き)

だんだんと、考えながら書いていかなくては…
真野が答えるのに自信なかった気持ちは、私の気持ち

第二話(2) 4つの紙(前書き)

第二話、まだまだ序盤？

第二話(2) 4つの紙

授業が終わり、放課後がやってくる。

(終わった…)

久々の学校は、とても長く感じる瞳

『お疲れ様』

あの後には、真野に頼る事も無く無事に過ごす事が出来たようだ

生徒達がそれぞれ放課後の行動を行っている中

真理子は、瞳に話しかけてくる。

「実行委員会行くよー！」

「ここじゃないの？」

「図書室だつて」

瞳は、鞆を持ち行く準備をすると

「行く前に買出し行かない？男子への差し入れ」

真理子が瞳に提案をしてきた。

「え、でも…先生も来るし」

「大丈夫、ヒグリンは、呼んで来るのに30分かかるのよ」

ヒグリンとは、担任 樋口ひぐちのあだ名のような。

ほとんどの生徒にそう呼ばれているのだろう。

「それに甘いのが好きだし、差し入れする女子もいるらしいのよね

…」

どうやら生徒から人気のある先生らしい。

真理子は、何処が良いんだろうなんて、言いながら瞳を買出しに引っ張っていく。

「真理子、買う物、金田くん達に聞かないと」

「実は…もう先に聞いてるんだ！」

瞳が知らないうちに聞いていたらしく、そのままダッシュで昇降口

へ走っていく。
瞳もその後を追いかけて行った。

下駄箱に到着した瞳だったが、先に着いていた真理子が見つ立っている。

どうしたんだらうと、覗いてみると紙を持っていた。

「何、真理子？ラブレター？」

冗談まじりでそう尋ねながら見るが、恋文ではなさそうだ。
その紙には、こう書かれていた。

さわぎになるのは いやだらう

紙の大きさは、メモていどの正方形、機械の文字で真ん中に平仮名で書いてある。

真理子は瞳に言う。

「瞳、自分の下駄箱も見てみなよ」

言われるがまま、下駄箱を覗くと靴の上に真理子が持つ、同じ大きさの紙が置いてある。

それは、二つ折りにされている。瞳は、手に取って開いて見た。

わかばさいをちゆうしせよ

真理子もそれを見て言う

「やっぱり」

「これ、脅迫状きょうはくじょう…？」

その手紙に言葉を失う。

その時、誰かがやってきた。

「高木！ここに居たのかよ」

それは、同じ実行委員になった北川だった。

北川は、少し口は悪いが人当たりは良いスポーツ系の男子だ。

声を掛けられ真理子は、反応をした。

「北川、これ…」

「女子にもきてたか」

北川は、その手紙を見るとそう言う。

「もって？それじゃ男子にも？」

真理子が質問をすると、北川は答えた。

「俺たちは、鞆の中だ。金田が今、担任呼んでる。図書室に行くぞ」
最初の実行委員会そうそう、気分が悪くなってしまう手紙に
後ろめたい気持ちになってしまう。

『瞳の実行委員全員か…』

真野も、ボソリと言った

図書室

瞳達は、図書室へ行くとそこには金田と担任の樋口先生がいた。
自分達が持っている紙を机に広げる。

おまえのむねにきいてみる

おこってからでは おそい

さわぎになるのは いやだろう

わかばさいを ちゅうしせよ

気味の悪い手紙、男子達は考え出す。

「うーん？」

「四つ合わせると、一応意味が通るようになってるのか…」
うなる北川に意見を言う金田

「目的は、何かしら？」

心配そうに言う瞳に北川が言う。

「わっかんね…先生はどうよ？」

「何かのイタズラだろう…これは、私が預かっておく」

先生は、紙を纏めるとポケットに入れた。

だが、それを講義したのは真理子だった。

「えー！もうおしまいなの？」

どうやら、謎解きでもしたいのか、すぐ終わってしまった会話に不服のご様子。

「こんな事にいちいち気にしてたら、キリがねーよ！」

北川が反論する。

だが真理子は、ターゲットを変えた。

「瞳は、気にならないの？」

話を振られた瞳は驚いたが答える。

「え、それは…気になるけど、今は若葉祭の事すすめないと」

瞳の正論に男子達は、納得する。

それでも、納得できない真理子は唸っていた。

そんな中、相談が始まる

「何が良いかな？」

瞳が考えるように話を振ると

「出し物については、クラスにアンケートを作ろう、コピーとか俺がやっておくから」

金田がそう意見を言った。

「あいつら書くかな？」

「とりあえずだよ、纏まるなら楽だろ？」

北川が意見を言うと金田はまた意見を言う

その話を聞いた先生も提案をする。

「それなら、明日の休み時間、職員室のコピー機を使いなさい」

「いえ、今日、家で作ってきますから、近所に安くコピーできる所があるんです」

話は纏まった頃、外はもう日が落ちていた。

ほとんどの生徒もいなくなっているようなので、この日は委員会は解散する事になった。

4人は、正門の前まで一緒に来ると、そこで別れた。

「じゃあね、瞳」

「うん、また明日…」

手を振って別れた時、門の壁に誰かが目に入った。

服装からして学校の関係者だろうか、近くによって見るとその人は用務員の人だった。

用務員は、ブラシを使い壁を磨いている

そこは、瞳が今朝見た落書きがあつた場所だった。

「用務員さん…」

近づくと、用務員も返事をする。

「ん、気をつけて帰るんだよ」

「はい、あの…落書きを消しているんですか？」

質問をすると、ああと答える。

「校門に悪さされるのは、久しぶりだよ。近頃はこんなイタズラもなくなつたと思つたんだけどねえ…」

少し呆れたように言う用務員。

『あれは不思議な落書きだったな』

(そうですね…)

少し気になる落書きだったが消されてからでは、思い出すことも出来ない

瞳は、用務員の人に挨拶をして、その場を後にした。

夜、寝間着に着替えた瞳は、電気を消すとベットに横になる。

(はあ…久しぶりの学校でいきなり実行委員になるなんて…)

溜息をつく瞳

(でも、真野さんのおかげで授業は助かったやいましたけど) 嬉しそうに言う瞳に真野も話しかける

『新学期は、楽しいか?』

(ええ、久しぶりの学校だもん)

『若葉祭も楽しみそうだなによりだ』

真野のその質問に対し瞳は、少しふくれた

(実行委員じゃなければ、楽しいと思いますけど?)

まだ少し後悔しているのだろうか

そのまま話題は、真野に対してに移る

(真野さんは、得意な科目ってあるんですか?さっきの答えからして…理数系かしら)

瞳に尋ねられて、少し考えてみる

『……特に得意とかは、無いと思うが』

真野には、特に苦手という科目が思い浮かぶ事が無かった

瞳は、授業の事を思い出し、答える

(もしかして、何でもできる人なんじゃないんですか?授業もちやんと理解してたし)

『それは、瞳が聞いてなかったただけだろう』

(そ、そんな事ないです)

そんな話をしていると、夜はどんどんふけていく。

眠くなつた瞳は、真野におやすみと声をかけ布団に潜る。

(真野さん)

『ん?』

瞳は思い出した事を眠い頭を少し起こしながら真野に話しかけた

(今日の、真野さんが助けてくれた授業で、あの状況が見えたよね?)

『…』

それは、機械のふたが閉じる瞬間、入院の検査で見たのと同じ光景

（あれは何なのかしら…）

『何だろうな…』

（それに、今朝の夢…あれも気になる…わ）

今朝の自分が飛び降りる感覚 瞳はまだ気になっていた

でも、その言葉を言った瞬間、瞳は眠ってしまうのでした

第二話(3) TIAMATの呪い

次の日

瞳のクラスは、バスケットで試合をする体育の授業

試合の見学側の瞳と真理子は、話をしていた。

「見た？今朝の例の落書き」

真理子は嬉しそうに話題を振った。

「昨日の校門の落書きの事？」

落書きと言われ思い浮かぶのは、昨日、門の前にあった落書きくらいだ。

「昨日？」

真理子は、不思議そうに聞き返す。

「違うよ、今日だよ。学校中の色々な場所に書かれている落書きの事、知らないの？」

それでは、昨日とは違う落書きなのだろうか、それなら瞳は見た事がない。

「あいかかわらずポツツとしてるんだから」

「むう……」

真理子は、思い出すようにその落書きを語り始める。

「確かね“三角形のマークの中になんか呪文が書いてあって”黒板の隅っことか階段の手すりとか。あちこちに書かれているらしいのよ」

それを聞いた瞳は、昨日のマークを思い出した。

「三角形のマーク……」

もしかしたら、昨日と同じマークのものなのだろうか

「形がねえ……」

指を動かすが空中だとまったく分からない。

『瞳』

真野は、瞳に話しかけた

(え?何?)

『得点ボードに書いてもらったらどうだ?』

真野は、点数を付けるボードを指摘する

確かに空中に書かれては、確認が出来ない

(そうね、それなら書けるよね)

瞳は、真理子に言った。

「得点ボードに書いてみたら?」

「あ、なるほど!」

二人がボードに向かっているとき、真理子の歩く足が止まった。

「どうしたの?」

真理子が見ているのは、得点を動かす数字の所。

試合で点数が入ったとき、その数字がめくられたそこに、小さく赤の三角のマーク

そのマークの中に赤で『TIAMAT』と、書かれていた。

「これ…」

それは、瞳が今朝、校門で見たマークそのものだった。

『これが学校中にあるわけだな』

(……)

真野も確認するように言葉にする

「これ、脅迫状と関係あるのかしら…」

瞳は、何気なくそう言葉がポロツとでた。

昨日からといい変な事が2回続けて起こると、そう思わずには居られない。

「そう思うと、何かありそうだよね」

真理子も頷くように言う。

体育館に授業終了の音が響き渡る。

片付けが始まると、そのマークがついた得点ボードもしまわられてしまっているのであった。

「実行委員に一票…」

金田がそう呟く

「でさ、まさか自分がこの目で見たら、思ってたんじゃない？」

今の時間は放課後、金田と北川を含めた4人は図書室にきていた今朝配ったアンケートを放課後回収をし、1つ1つ確認の作業をしている。

そんななか、違う話題で盛り上げようとするのは、真理子だった。まったく自分担当のアンケートの紙には、手も触れず。さっきからずっと三角のマークの話をしていた。

「こつちも、『実行委員に任せた』だってよ」
つまらない顔で言う北川

「だから、めちゃくちや驚いたってゆうか、全身がゾツとしてさ」

「無回答が1つ…」

金田が、無回答を別の場所に置いて分ける。

「ひよつとしたら例の脅迫状と関係あるのかな？って瞳と話してたのよ」

「私の所は、実行委員に一任が8票かな…あと、お化け屋敷1票」
まったく話を聞かない3人に真理子は、怒り出した。

「ちよつと、人の話聞してるの?!」

「聞いてるよ…それより高木の集計どうなってるんだよ」

北川は、真理子にそう話をぶつけると、真理子は、怒り任せに言う。

「喫茶店が1票、あとは全部一任！」

「あとつていくつだよ、いい加減だな…」

北川は、呆れた声で呟く。

「それにしても、委員まかせの票が多いよね、若葉祭に興味無いの

かな…」

瞳は、アンケートを見ながらガツカリする。

すると元気付けるように北川が言った。

「それをどうにかするのが俺らの役目だつて！」

少しガツツポーズを試みせると、真理子が茶々を入れた。

「へえ…どうやって？」

「そ、それをこれから考えるのさ」

「なんだ、どっちみち考えないといけないんじゃない」

口論を始める二人

『仲が良いな』

真野は呆れたように言った

(ま、まあ…確かに…って、そうじゃなくて止めなくちゃ)

「やめて、二人とも」

瞳が間に入ることで、二人の口論は止まった。

「あのさ」

二人が口論を終え、ちよつとするとさっきまで黙っていた金田が三人に話しかけた。

「1つ思いついたんだけど」

「何か考えがついたの？」

瞳の質問に金田が答える。

「くす玉を作るのは、どうだろうか？」

金田が言うには

クラスの皆の思いのメッセージを書いてくす玉に入れ、屋上からぶら下げる。

そして、若葉祭の最後に開くというもの

その話に嬉しそくに瞳は賛同した。

「皆の願いが飛び出すんだね、素敵かも！」

「ただ引くのってつまらなくない？」

その話に賛同しないのは、真理子だった。

「だったら、ミスコンとかきつとやるだろ？そいつに引かせれば良いじゃん」

北川が提案する。だが、また真理子は否定した。

「面白くない…」

「先生でも俺は、良いと思うけど」

金田も考えながら言う。

「それこそ、もっと面白くない…」

否定ばかりする真理子にとつとつ、北川は怒った。

「お前な！だったら、お前が考えたらどうだ？否定ばかりしやがって…」

言われて真理子は考え始めた。

が、やっぱり浮かばないのだろう

「もっと、皆で楽しめれば良いのに…」

真理子の呟きに瞳も頷く。

「そうね…何か無いかしら」

その疑問に4人は、頭を抱えるように悩みだす。

くす玉を作るのは、良いアイデアかもしれないが、ただ引くとなると面白みにかけるのも事実

学際として、楽しめる何かを考えるが、ただ時間だけが悪戯に過ぎていく。

ふと、時計をみると結構時間が過ぎていく。

委員の話し合いに、参加する予定の担任が居ないのに気が付いた瞳。

「先生、まだ職員会議なのかしら？」

それで気がそれたのか真理子が別の話題へと持っていこうとした。

「きつと、呪いの図形の話で遅くなってるのよ」

「ただの落書きだろ？」

北川は、呆れたように言う。

「私も見たよ。昨日、校門の所にあったの」

真理子が嘘を言っていないのを証明するように、瞳も話しに加わった。

その話を聞いた北川は、コロツと態度を変えた。

「そつか…事件は昨日から起こってたのか」

「あら、瞳にだとやけに素直ですね〜？」

「ば、ちげーよ。ただ脅迫状と落書きが同じ日に起こったんなら、何かあるって思ったんだよ」

茶々をいれる真理子に、慌てて弁解をする北川。

その会話に、真面目な顔で考えているのは金田だった。

「図形に昨日の紙…何か関係があるのかな」

「私は、絶対！関係あると思う」

とうとう、話題は若葉際から落書きの話に変わってしまった。

昨日から始まった図形と脅迫状。そして、今日は色々な場所に存在する図形。

どうにも関係ないとは、言いきれない。

（真野さんは、どう思う？）

瞳は真野に尋ねると

『瞳はどう思う？』

逆に質問でかえされた

（私は…関係あるかなって）

その答えに真野も頷いて答えた

『そうだな、僕も関係あると思う』

「私、気になるな」

話している3人に瞳は言う。

それが3人の気持ちを押し付けたのか最初に北川が立ち上がった。

「そんじゃあ、呪いの落書きでも調べてくるか！」

「図形だつてば…」

真理子が呆れたように言う。

「だったら、脅迫状を調べるのと、図形調べるので分かれよう」
金田が提案をした。

そして、話し合った結果

瞳と金田が脅迫状を調べる 真理子と北川が落書きを調べに行く事になった。

『調べるのは、脅迫状か』

(うん、気になるし…それに)
『それに?』

瞳は何となく真理子が北川の事が好きなんじゃないかと思った
だが、言葉には、しなかった

(さあ、職員室へ行かなくちゃ)

金田に声を掛けると、瞳は職員室へ行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1902j/>

アナザー・マインド【もう一つの精神】

2010年10月12日08時15分発行